

令和 4 年度  
千葉大学国際教養学部  
学位記伝達式式辞

令和 5 年 (2023 年) 3 月 23 日

本日ここに学士 (国際教養学) の学位を取得し、卒業を迎えられた皆さんに、国際教養学部の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。また、皆さんの成長を見守り、生活や勉学を応援してこられたご家族や関係者の皆さまにも、ここに深甚なる敬意を表します。

千葉大学に限らず、世界の大学が COVID-19 の影響のもとで様々な困難を抱えて 4 年目となりましたが、ようやくこの 4 月からは授業等で「マスクの着用を求めないことを基本とする」ということとなります。私たちはウイルスと付き合う術を学んできたと言えることができるでしょう。また、コロナの影響もあって、教育における DX (Digital Transformation) が圧倒的に進みました。COIL (Collaborative Online International Learning) と呼ばれるオンライン国際協働学修は、コロナの如何にかかわらず、大きな進展を見せています。この間、コロナがあったからといって、けっして学びを止めることのなかった皆さんの努力にも敬意を表しておきます。

さて、皆さんの多くは、国際教養学部の 4 期生ということになりますが、ここで改めて千葉大学の国際教養学部はどのような学部なのか、ということについてごく手短かに考えてみたいと思います。

教養 liberal arts という言葉は、ヨーロッパ中世の自由七科 artes liberales に淵源を持つことは言うまでもありません。このうち、文法、修辞学、弁証法の三科 trivium は初級、算術、幾何、天文学、音楽の四科 quadrivium は上級と考えられていました。三科は人文学・言論の領域ですが、四科は自然科学・事物の領域でした。音楽も数理に関する学問と考えられていたことに留意して下さい。

18 世紀イギリス (スコットランド) の経済学者として知られるアダム・スミスは皆さんが良くご存知の『国富論』(『諸国民の富』) を著しただけでなく、『道徳感情の理論』という哲学・倫理学の書物を書いています。また、文学・修辞学講義や法学講義を行っていたことが、残された学生の講義ノートから分かっています。さらに、天文学史についての論文も書いています。アダム・スミスは、まさに、liberal arts を体現した学者でありま

したし、彼の全体像を理解するためには『国富論』だけでは足りない、むしろ『国富論』を理解するためにも、彼の学問全体を総合的にとらえることが必要だと分かります。

ここから明らかになることの一つは、教養は最初から人文と自然を兼ね備えていたということです。国際教養学部の英語名称が Liberal Arts and Sciences となっていることは、本来教養にはこれらの要素が全て入っているということの表明です。私は、国際教養学部を人文社会科学系の学部であると考えすることはそもそも誤りだと思っています。古代中国でも、六芸というものがあり、士以上の者の学修すべきものとされました。それは、礼（倫理）・楽（音楽）・射（弓術）・御（馬車）・書（文学）・数（算数）の六種の技芸を指していました。ここでも、数が入っているのは注目すべきところです。

二つめは、教養は教養として完結するものとは考えられていなかったということです。自由七科を学んだ者は、その後には神学や法学、医学の専門に進んで、それを学ぶことができました。現在のアメリカでは、学部では Liberal Arts College で教養を学び、そこから Law School や Medical School に進学していくこと、この二つの School はいずれも大学院であることは、この関係性を明確に示しています。つまり、法学や医学は日本と異なり大学院でしか学ぶことができないということです。国際教養学部の理念に Late Specialization を据えているのはそのためですし、国際教養学部の英語名称が本学の他の専門学部のように、Faculty や School の語（たとえば、文学部 Faculty of Letters、理学部 Faculty of Science、看護学部 School of Nursing）ではなく、あえて College の語を使用していることはその初心を示しています。

三つめは、学問というのは放っておけばどんどん専門化・細分化するということです。このことは、千葉大学の歴史を少し繙いてみれば明らかとなります。1949年に千葉大学が新制大学として発足したときは、学芸学部という学部がありました（この時、他に工芸学部と園芸学部が創立されています。すべて「芸」の字が入っていることにご注目下さい）。学芸学部は翌1950年には文理学部と教育学部に分かれますが、この文理学部はさらに1968年に人文学部と理学部に分かれます。つまり、千葉大学の文理というのはもともとと同じ根を持っていたのです。人文学部は1981年に今度は文学部と法経学部（現在の法政経学部）に分かれます。これを見ても次第に専門化と細分化が進行していることが分かります。これは学問の発展であると同時に退化でもあります。

以上から明らかとなることは、国際教養は本来的に文理混合であること、学問の専門化・細分化に抗してそれを総合していく学部であること、そして国際教養はそれ自体として完結する専門学部ではない、ということです。つまり、国際教養学部を卒業した皆さんは、これで学業を修了したわけではなく、これから社会や大学院で新たな学びを継続するということです。国際教養学部においては、他の専門学部のように専門技能や資格を取得

して学修を終えるものではありません。皆さんには、それぞれの場で、今後とも課題解決のための学修に取り組み、グローバルな世界と足元の社会に存在する課題を実践的に解決し続けていくことを求めています。そのことが国際教養学部創立の趣旨に適っています。学位記にある学士（国際教養学）というのは常に未完であると考えて下さい。皆さんにとっての国際教養は、これから作られていくのです。

個人的なことを述べさせていただければ、10年ほど前に、のちに国際教養学部になる「新しい教養学部」というものを考えはじめ、7年前にその構想は現実となりました。そして、いわゆる Founding Dean としてこの学部を一貫して見続けてきた私も、ここで卒業となります。もちろん、私自身も未完であり、皆さんとともにこれからも学び続けていきたいと念じております。

最後になりますが、皆さんのここまでの学業が多くの教職員、教員はもとより特に職員の方々の献身的な努力に支えられていたことを忘れないで下さい。学生諸君と直接関わった学務系の皆さん、歴代の SULA の皆さん、学部の基礎を支えてくれた総務系の皆さんは、千葉大学の、そして国際教養学部の大切な構成員です。

また、皆さんが国際教養学部で学ぶさいに培った相互のつながりは、今後もけっして途絶えることはありません。誰かに意見を聞いてみたい、考えるきっかけが欲しい、と皆さんが思うことがあったら、ぜひこの学部や同窓会に問い合わせして下さい。未来の教職員や仲間たちが必ずや皆さんを支えてくれることでしょう。

以上をもちまして、卒業にあたっての私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。これからの皆さんのご活躍を心から期待しています。

千葉大学国際教養学部長 小澤 弘明